

## 「コミュニケーション」グループ

本校舎幼稚部・土田江利子、小田島史世、菊地香南子  
熊谷美智子

本校舎小学部・及川恵貴、新沼登貴子、千葉秀明  
千厩分教室小学部/中学部・藤盛知香子、今野喬樹、  
村上明枝、林恒太、伊藤悠

本校舎中学部/高等部・高井翼、高橋珠、小野寺晶子、  
高橋明季、舘澤英理、奥友藍、角舘愛加

本校舎高等部・宮本富男、佐々木諭子、岩谷あゆみ、  
小原絹代、檜山裕子、千葉廣見

山目校舎小学部/本校舎中学部・千葉早苗、阿部美早紀、  
千葉恭子、佐藤裕子、昆七重

### 1 研究テーマ

「個に応じた伝え合う力を伸ばす取り組み」

### 2 研究内容

本グループは、幼児児童生徒の課題、教師のニーズから6つの小グループに分かれて、それぞれの研究テーマに沿って研究実践を行っていくこととした。各小グループの研究内容を以下に示す。

<本校舎幼稚部>

- (1) 毎月の計画的な設定遊び
  - ア 遊びの内容
  - イ 道具等教材の工夫
  - ウ 幼児の変容の記録

<本校舎小学部>

- (1) 話し合い活動を取り入れた授業について（場の設定）
- (2) 「話す」だけでなく「書く」「読む」を通した言語活動について

<千厩分教室小学部/中学部>

- (1) 事例検討
- (2) 指導方法についての協議

<本校舎中学部/高等部>

- (1) 事例研究
- (2) 生徒のコミュニケーションツール、SSTについて

<本校舎高等部（重複学級）>

- (1) 思いや気持ちを表現させるためのツール
- (2) 自分の意思を表示させるための工夫
- (3) 本音を引き出すためにできること

<山目校舎小学部/本校舎中学部>

- (1) コミュニケーションツールの情報交換
- (2) 発声、発語の指導、支援の研修
- (3) 事例研究

### 3 研究計画

	本) 幼稚部	本) 小学部	千厩) 小中	本) 中高	本) 高	山) 小/ 本) 中
H28. 5	〈課題別〉小グループメンバー検討, テーマ、内容の検討					
6	〈課題別〉小グループメンバー決定, テーマ、内容の検討					
7 ①	5・6月の遊びの様子まとめ 7・8月に向けて	研究授業 検討会 授業研究会	事例(実態と今の取り組み)を持ち寄る	対象生徒の紹介	実態把握	コミュニケーションツールの情報交換
7 ②	〈課題別〉小グループの研究計画及び7月の研究会の報告					
8	7・8月の遊びの様子まとめ 9・10月に向けて	授業研に向けての教材研究	指導法についての協議	実践事例のまとめ	実践	発声、発語の指導支援の研修会
9	東北豊研に向けたレポートの確認	授業研に向けての教材研究	事例検討(指導を実践しての事例)①	実践事例のまとめ	実践	事例研究
10	9・10月の遊びの様子まとめ 東北豊研の発表に向けて	研究授業 授業研究会	事例検討(指導を実践しての事例)②	実践事例のまとめ	実践	事例研究
11	〈課題別〉小グループ実践報告、全校研究会に向けて					
12	〈全校研究会〉(中間報告)					
H29. 1	小グループの成果と課題について					
2	〈課題別〉課題別グループのまとめ					

### 4 成果と課題

#### (1) 成果

本グループは2校舎2分教室、幼小中高の4つの学部にも所属する職員30名で構成されている。そのため『コミュニケーション』と一言で言っても、幼児児童生徒の年齢、発達段階、障がい特性が様々で、抱えている課題も多岐にわたっていた。そこで幼児児童生徒の実態や職員が抱える課題に近い小グループを作り研究実践を進めた。

小グループ内では、全員が意見や感想を出し合い、共通理解を図りながら個々の課題に迫る話し合いができた。それぞれの小グループの計画に沿って事例研究や授業研究等を行ったところ、障がい特性に応じた支援方法や補助具等について具体的な検討や見直しができた。同じ学部の職員が意見を出し合ったことで日頃の保育や授業において指導の改善に直結したグループや、複数の学部の職員が観点の異なる立場からの意見を出し合ったことで「気づき」が得られたグループがあった。

普段は校舎や学部が違えば授業や幼児児童生徒の様子が見えないが、課題別グループの研究会で小グループの研究実践の報告をすることにより、指導の一部が見え、障がい種の特性に応じたコミュニケーション支援や幼稚部から高等部までの発達段階においてキャリア教育的な観点からも系統的なコミュニケーション支援について触れることができた。

今年度は、幼稚部が東北豊教育研究大会の発表内容に合わせ、日々の実践とも共通した内容で研究を円滑に進めることができた。また、小学部は初任者研修2年研

修と併催の形で授業研究会を実施し負担を軽減することができた。

## (2) 課題

上記で述べた成果がある反面、課題別グループ全体としては、回数や時間が限られた中で小グループの研究実践の報告を行ったため、研究内容や成果を知る時間がもう少しとれば良かった、他のグループの授業や実践を直に学ぶ機会も欲しい、などの意見が出された。他のグループの取り組みがやや見えにくく研究内容が全員に浸透しているのかという課題が残った。

小グループ内では、校舎が違うので日常的な情報交換が難しい、授業に入って経過を十分に観察できる態勢を作るのは難しかった、生徒の変容が微小で成果が目立って見えてこず、行き詰まりを感じたとき相談できる場所があれば良かったなどの研究態勢としての課題が挙げられた。

障がい種によっては、発達障がいをもつ生徒たちに対して検討した支援方法が同場面において必ずしも有効ではなかった、肢体不自由児の要求提示の手段としてカードを使用してきたが、手元にカードがないときにどうするか、重度重複障がいの児童生徒への客観的な評価方法をどのように用いるかなど、今後日々の指導で改善していく課題も見えてきている。

## 5 参考文献

<本校舎幼稚部>

文部科学省「幼稚園教育要領解説」

齋藤孝「学ぶ力は生きる力」